「やぶさめサミットin毛呂山2010」開催記念

特集 流鏑馬考

毛呂山歴史散歩 211
流鏑馬サミット参加団体の紹介⑨

出雲伊波比神社の流鏑馬
（埼玉県毛呂山町）

ゆずの里・毛呂山町

毛呂山町は、埼玉県の南西部、外秩父山地と関東平野の接点に位置します。人口約3万7千人、町の約60パーセントを山地が占めます。町西部の山地は、陽当りがよく、かつては良質な杉材を産出していました。また、江戸時代からゆずの産地であり、初冬の山々には黄金色に輝くゆず畑が広がります。町東部には鎌倉街道の主要道の一つ「上道」が南北に走り、現在も良好な状態で散策でき、文化庁選定「歴史の道百選」に名を連ねます。中世の史跡も多く、歴史の深さを体感できます。

出雲伊波比神社と流鏑馬

出雲伊波比神社の流鏑馬は、旧毛呂郷の地域が3つに分かれ、3頭の馬を奉納して行います。この旧毛呂郷は、中世に活躍した毛呂氏が領主として治めていた地で、出雲伊波比神社も毛呂氏の氏神である飛来大明神を祀っています。

出雲伊波比神社の流鏑馬は、源頼義・義家父子が奥州征伐の際、石清水八幡宮の神霊を奉り八幡宮を創建、戦勝を祈願し、康平6年（1063）の凱旋の途中、再び立ち寄り戦勝の御礼にと流鏑馬を奉納したのが始まりと伝わっています。

現在、出雲伊波比神社の流鏑馬は、毎年11月3日と3月第2日曜日に行われていますが、江戸時代には旧暦9月29日に飛来大明神の流鏑馬、春の流鏑馬は旧暦8月15日の八幡神社の祭礼として催行されました。

出雲伊波比神社は、かつては旧毛呂郷内の祭馬区の一つである前久保地区の飛地となっており、前久保地区の神社でした。

秋の流鏑馬

乗り子は稽古、そしてお精進
～10月31日まで～

秋の流鏑馬は、祭の10日ほど前に馬を借用し、各祭馬区の馬宿で口取りたちが世話をします。馬が到着した日の午後から乗り子は神社の馬場で稽古を始めます。稽古は毎日早朝と夕方に行われ、10月31日の稽古じまいまで続けられます。この稽古は乗り子にとって本番同様に馬場で馬を走らせる貴重な練習期間になります。最初は、馬も慣れず乗り子や口取りを心配させる場面もありますが、日を追うにつれ、乗り子も馬を乗りこなすようになり、1週間で大きく成長したことがわかります。

そして、10月31日稽古じまいの日、最後の稽古を終え、乗り子たちはその夜から射手として本番の流鏑馬に向けてお精進に入ります。お精進とは、神社に籠もり、何度かミタラセ池に行ってみそぎを行い、繰り返し身を清めることです。

このように射手となった子供が稽古を繰り返し、流鏑馬を行う祭礼は国内でも数か所しか残っておらず、稽古の伝統が残っていることが大変貴重な例となっています。

特集 流鏑馬考

的宿へ乗込み（ノッコミ）の日
～11月1日～

11月1日、3人の乗り子は衣装を受け取り、陣笠を被り、夕刻に3頭の祭馬が揃って毛呂本郷の的宿（本陣）へ乗り込みます。これをノッコミと呼んでいます。

この日から乗り子と矢取りが的宿に泊まり、口取りも祭馬宿に泊まります。これもお籠もりの一つで、乗り子と矢取りは事あるごとに毛呂川でみそぎを行ないます。

重殿行き・町回り
～11月2日～

この日は宵祭りともいわれる日で、乗り子と矢取り、口取りは衣装をまとい、行列をなして前久保地区にある重殿淵へと出発します。重殿淵は、湧水地だった場所で、ここで馬の口すすぎをして清めます。明治25年の記録では、射手も口取りも川原被いを行ったとあるので、重殿淵での口すすぎにもみそぎの意味があるのでしょう。

その後一行は、前久保地区で「焼米」の接待を受けます。「焼米」とは、炒った大豆と蒸かした粳米を混ぜたもので戦場の保存食を表しているのではないかといわれています。

最後は神社下のミタラセ池でも馬の口すすぎを行い、神社へと向かいます。神社では神職家による一行への接待が行われ、夜も更けたころ、町回りをしながら的宿へと戻ります。その日の深夜、乗り子によって「追出の餅つき」と呼ばれる餅つきが行われます。

本祭 ―朝的・野陣・夕的―
～11月3日～

11月3日の祭礼当日は、早朝、毛呂氏の末裔といわれる大谷木一族が本殿の鍵を開けるところから始まります。

乗り子は午前9時ごろ神社に到着し、騎射を1回、鞭を2回、計3回の朝的を行います。その後、馬場南端に陣幕が張られ、乗り子と矢取りは神官から接待を受けます。これは野陣と呼ばれています。

朝的と野陣を終え、乗り子と口取りは、的宿に戻り、夕的の出陣を待ちます。出陣を前にした的宿では、乗り子と矢取りが正装し、「追出の酒盛り」を行います。これは一定の順序で盃を回し、湯漬けの飯（煮立ての飯に湯と塩をかけたもの）を1本の箸で食べる儀式です。

午後1時30分ごろ、いよいよ出陣となり、的宿を一の馬から順に出発し、「榎堂」と呼ばれる大榎を回って、神社へ向かいます。出陣にあたっては、沿道の家いえから深夜に乗り子がついた追出の餅が撒かれます。当社の流鏑馬は一の馬は白で源氏を、二の馬は紫で藤原氏、三の馬は赤で平氏を表します。また、一の馬から三の馬の順で序列が決められており、必ず一の馬の指示によらなければならないとされています。

馬には各地区の人びとがブチ棒という軍勢を表す祭具を手に随行します。3頭が馬場に入ると、乗り子は正装のまま馬場を一往復する馬見せを行い、次に一の馬のみが一の的で1回だけ騎射を行う「願的」と呼ばれる儀式を行います。

それに対して流鏑馬は「矢的」と呼ばれ、3つの的に3回矢を放ちます。当たり矢は縁起が良いとしてかつては観衆が奪い合ったものです。矢的に続き、乗り子は扇子やノロシを両手に持ち、馬場を駆けながら馬上芸を演じます。その後も縁起物の福ミカン、餅撒きが行われ、鞭を持った騎乗が暗くなるまで続き、夕的は終わります。

夕的が終わり、各祭馬区の提灯に火が入れられ、漆黒の闇を下山していく姿も幻想的です。

春の流鏑馬
～もう一つの毛呂山町の流鏑馬～

出雲伊波比神社では、春の流鏑馬として、毎年3月の第2日曜日にも流鏑馬が行われています。

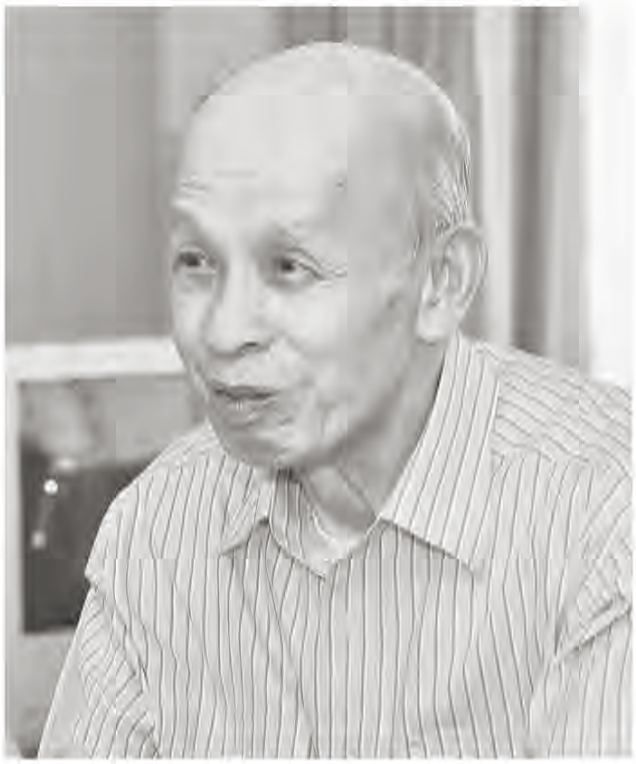
春の流鏑馬では「願的」という行事が行われ、6歳までの幼児が乗り子となって、馬上から的に矢を射るというもので、秋祭りの流鏑馬とは大きく異なっています。

かつて、出雲伊波比神社に勧請された八幡宮の祭礼として、鎌倉の鶴岡八幡宮と同じ8月15日に行われていた流鏑馬が、出雲伊波比神社の春祭りとして幼い子供を乗り子に、今に伝えられています。

やぶさめサミット開催記念
特別インタビュー

毛呂山町やぶさめ保存会長
紫藤利夫

聞き手
斉藤修平
やぶさめサミット監修担当


紫藤利夫さん

流鏑馬（やぶさめ）という伝統文化を後世に伝えていくためには

「どこの地域の流鏑馬もそれぞれ問題を抱えている。しかし、それぞれが前向きに対応していかなければならない。その意識が流鏑馬に対する誇りにつながっていくものだと思います」…… 紫藤

毛呂山町の伝統文化といえる流鏑馬における現在の課題。そして課題を克服するためには何が必要か。

紫藤　現状を維持していければ、一番良いのでしょうが、各祭礼区ともまつりに携わる人が少なくなっているのが、今の大きな課題といえます。

斉藤　毛呂の流鏑馬は、祭礼区によっては当番区がおよそ10年に1度回ってきます。これはとても優れたシステムだと思います。このシステムで今まで続けてきたのですよね。

紫藤　しかしながら、当番区だけでは立ち行かず、他の地区から応援してもらっているのが現状です。

斉藤　現状は厳しいですね。しかし、毛呂本郷地区だけは的宿（まとやど）のため、毎年行っていますよね。

紫藤　ええ、毛呂本郷地区は、本来、5つの当番区に分かれています。しかし、本陣としての負担の大きさから、当番区の統合というかたちで再編されたため、他の地区とは性質が異なります。毛呂本郷地区以外は昔からの当番を続けるところに魅力があると思います。

斉藤　その魅力とは、約10年に1度行うことに対する、責任感や当番区における一体感といったものと捉えて良いのでしょうか。

紫藤　そうです。そこに後世に伝えるという意識が生まれると私は思い

ます。特に一の馬を担当するときには、他の地区をリードしようとする責任感が伴いますね。それが一の馬の責務であり特権でもあります。

斉藤　一番重要なことは、何とか無事に執行しようという地区の祈りや意地が生まれるということですね。

紫藤　まつりは、地域内の若い人から年配の人まで一体となって行います。若い人は経験のある年長者に聞かないと分からないことが多く、私のところにもよく若い人が聞きに来ました。そうして、若い人とも仲良くなり、流鏑馬のいろいろなことを教えた経験があります。

斉藤　それが伝承の力であり、魅力ということですね。

紫藤　そうですね。行事の本質は、当日までの準備期間にある期待感や昂揚感だとも思います。そういった地区における心のカタチが一番大切なのでしょうね。確かに毛呂から外へ出た人も流鏑馬は強く心に残っているようです。

斉藤　それは重要なことだと私も思います。これからは、その心を毛呂山町全体に広げていくことが大切になると思います。「毛呂の流鏑馬」から「毛呂山の流鏑馬」へと変わっていくといいですね。

紫藤　毛呂の流鏑馬を守る人たちと毛呂山の流鏑馬を愛する人たちとの二重奏で後世に伝えていく必要があります。そのためには、私も多くの人に流鏑馬を語り、その種を蒔いていかなければなりませんね。

いよいよ開催される「やぶさめサミットin毛呂山2010」において何を伝えたいか。

紫藤　私は、当事者が自分たちの言葉で話すことが「やぶさめサミット」のひとつの価値だと思います。どの団体もそれぞれに問題を抱えているはずです。そのことを聞けるだけでも貴重なことだと思います。

斉藤　確かに「やぶさめサミット」では、各団体が抱えている諸問題を自ら話すことで、あらためて問題意識を再認識することができますね。

紫藤　どの団体も多くの問題を抱えており、それぞれの団体が悩んでいると思います。それを何とかしていかなければならないわけです。その前向きに取り組む意識が流鏑馬に対する誇りへとつながっていくものだと私は思います。

斉藤　なるほど、他の団体が抱える問題もいつ自らの団体が関係してくるか分からないわけですから、どの団体もよく聞き、参考にする必要がありますね。

紫藤　その意識が交流という形になっていけば、それぞれの団体が前へ進んでいくきっかけとなるかもしれません。

斉藤　同じ馬を扱う行事を守る団体同士ですから、手を携えて守っていこうという姿勢は評価の対象になりますし、日本の伝統文化を支えるひとつの核になるかもしれません。

紫藤　伝統行事の継承は、関係者だけの力では難しいことです。周囲の協力があってこそ継承されていくものだと思います。

斉藤　来場する皆さんもそのあたりに注目をして見ていただければ面白いのではないでしょうか。

紫藤　そうですね。そうなると当事者もそういった気持ちを持って発表に望まないといけませんね。

斉藤　また流鏑馬は、見学に訪れる皆さんが見てくれているからこそ、当事者側の励みにもなりますね。

紫藤　観客が多いとそれだけ責任感が増えるのは事実です。逆に見学する人も伝統を守る人たちに敬意を持って見ていただければありがたいと思います。そうなれば、流鏑馬の継承がもっと良く展開すると思うのです。

斉藤　ところで、紫藤さんが流鏑馬に携わるようになったきっかけは、どういったことからなんですか。

紫藤　私は父の影響で流鏑馬に携わるようになったのですが、流鏑馬を行っているうちに、いつの間にか誇りや自覚、流鏑馬に対する責任感が芽生えていったような気がします。

斉藤　それは「文化遺伝子」というものですね。父親の影響とは、その遺伝子が働いたからなのではないでしょうか。

紫藤　それでは、その「文化遺伝子」が毛呂山町全体に伝われば、「毛呂山の流鏑馬」へとつながっていけるのではないでしょうか。そのためにも「やぶさめサミット」では、当事者と来場者が一体となれるようにしていく必要がありますね。ぜひ、多くの人に見ていただきたいと思います。

斉藤修平さん

現在、埼玉県立大学・早稲田大学兼任講師として教鞭をとるかたわら各地の伝統文化の研究も行う。専攻は民俗学。「やぶさめサミットin毛呂山2010」では監修担当。

受け継ぎ、守り、伝える人たちに迫る！

一の馬・前久保

乗り子　糸川康平くん

サミットがあり、いろいろな人が見に来るので、今から本祭の日が楽しみです。

流鏑馬の乗り子は今年で3年目になります。初めての年は、馬に乗ることの難しさを感じていましたが、今はもう大丈夫です。今年は、一の馬に乗るため責任も大きくなりますが、サミットも開催され、たくさんの人が見に来ると思うので、今から本祭の日が楽しみです。

今回の流鏑馬は、乗り子としての最後の流鏑馬になりますので、乗せてくれた皆さんに感謝の気持ちを持ちながら乗り、ぜひ成功させたいと思います。また今後は、口取りなどで流鏑馬に係わっていきたいと思っています。

出雲伊波比神社の流鏑馬は、子どもが馬に乗り、矢を射るという全国でも数少ない流鏑馬です。たくさんの人に見てもらい、もっと広く知られるようになると嬉しいです。

糸川康平くん

二の馬・毛呂本郷

口取り（くちとり）　山口裕己（ひろき）さん

自分たちが率先して声をかけることで、若い人を増やしたいと思います。

口取りは今回で、4回目になります。口取りは、祭馬（さいば）の世話だけでなく、流鏑馬まつりの主役である子どもたちを支え、盛り上げる役でもあります。本祭の日は、子どもたちだけでなくお客さんにも細心の注意を払い、自分自身も楽しくまつりを行いたいと思います。

流鏑馬まつりには、毎年多くのお客さんが見えますが、観客が多ければ多いほどやる気が沸きます。今年は、サミットもありますが、ぜひ多くの皆さんに来てもらいたいと思います。

口取りはこれからも続けたいと思いますが、今は若い人が少ないことが気になります。自分たちが率先して声をかけていくことで、若い人たちにもっと参加をしてもらえれば、流鏑馬まつりももっと盛り上がると思います。

山口裕己さん

三の馬・長瀬一区

後見　斉藤秀樹さん

今後、携わる人たちに資料などを残すことも後見の務めだと考えます。

後見とは、分かりやすく言うと自らの地区のまとめ役のことです。私は、長瀬一区で後見の代表をさせていただいていますので、他の地区との調整も大切な仕事のひとつです。後見は、何よりも事故なく無事にまつりを終えるために細心の注意を払う必要が求められます。

長瀬一区は祭馬区（さいばく）が10年に1度しか回ってこないため執行するときには、以前に行ったことを再確認することから始めないといけません。そのためにも、今後携わる人のために資料などを残すことも後見の務めだと考えます。

今後は、地区内に若い人が少ないため、ほかの地区との協力体制を築いていく必要が求められます。伝統文化を後世に伝える努力も現在、携わっている人の務めであると思います。

斉藤秀樹さん

特集 流鏑馬考

「やぶさめサミット」を見に来ていただく皆さんへ

歴史民俗資料館長　村木　功（いさお）

毛呂山町の流鏑馬は、900年以上続けられてきた伝統のある行事です。その特徴は、毛呂郷という共通した歴史的背景を持つ地域の各祭礼区が、受け継ぎ、守り、伝えてきたというところにあります。しかし、現在、関係者はその形式が失われないよう継続するために苦慮されています。各祭礼区とも現在の状態で維持ができていければ、一番良いのでしょうが、時代の流れもあり、様ざまな問題が発生しています。

しかしながら町の文化資源であり、町のシンボルともいえる流鏑馬が継続されていくためには、町からの支援もさることながら、地域の連帯が不可欠といえます。今後は、柔軟な発想で対応していく必要があるのではないかと考えます。

今回、サミットに参加する各地の団体においても多くの課題を抱えていると思われます。少子高齢化による後継者の問題、馬の確保や取り扱いの問題、地域間におけるつながりの希薄化などがあげられます。そのようななか、当町を含む9団体が一同に介し、流鏑馬を受け継ぎ、守り、伝えていくことについての話し合いを行います。このサミットが、それぞれの団体にとって、まつりとは何か、地域とは何か、社会とのつながりとは何かということを発見できる場になることを願います。

ご来場いただいた皆さんには、ぜひそういった話し合いをお聞きいただくとともに、流鏑馬をとおして郷土や地域を見つめ直すきっかけとなればと思います。

今回のサミットでは、各団体の流鏑馬を映像も一部交えて発表しますので、毛呂山町とは違う流鏑馬を見ることができます。また、サミット来場者全員にサミットの解説案内書とクリアファイルの記念品もありますので、ぜひお越しください。

私たち資料館の使命は、地域に根付いた伝統文化を守ることにあるといっても過言ではありません。貴重な伝統文化が後世に伝えていかれるように、今後も力を尽くしていきたいと思います。

村木館長

近日開催!!　『やぶさめサミットin毛呂山2010』

10月31日（日）

シンポジウム
「やぶさめをまもる～伝統文化を後世に伝えていくために～」

時　間　午前9時30分～午後2時45分
場　所　福祉会館ホール
申込み　申込み不要

流鏑馬行事「稽古（けいこ）じまい」見学

時　間　午後3時15分～4時30分
場　所　出雲伊波比神社馬場
申込み　申込み不要

10月31日（日）～11月3日（祝）
やぶさめ交流展

時　間　午前9時～午後4時
場　所　福祉会館ロビー
内　容　やぶさめサミット参加団体の流鏑馬衣装を展示

問　歴史民俗資料館☎（295）8282

11月3日（祝）

県指定無形民俗文化財
出雲伊波比（いずもいわい）神社の流鏑馬（やぶさめ）が奉納されます

時　間　朝的（あさまと）　午前9時から（30分程度）
　　夕的（ゆうまと）　午後2時30分ごろ～5時ごろ
場　所　出雲伊波比神社

900年余りの伝統がある出雲伊波比神社の流鏑馬の本祭では、町内の小・中学生のなかから選ばれた乗り子が、矢的（やまと）、センス、ノロシなど、様ざまな馬上芸を披露します。また、本祭に至るまでにも様ざまな行事が行われます。伝統ある流鏑馬行事に触れてみませんか。